

経済学史学会西南部会第117回例会
進化経済学会九州部会 合同

古典派価値論から新古典派価値 論への転換点

塩沢由典

目次

1. 貿易理論の歴史を考える意義
2. リカード問題の「最終解決」
3. ミル「解決」の絶大な影響
 - ミルの「解決」が新古典派理論を必然とした。
 - 古典派価値論と新古典派価値論の分岐点
 - 新古典派革命の再検討
4. 21世紀経済学への示唆

1. 貿易理論の歴史を考える意義

国際経済学と経済学説史

● 経済理論

- 国内経済[一国経済] (ミクロとマクロ、非主流諸派)
- 国際経済 ◆ 貿易論(ミクロ) ◆ 国際金融論(マクロ)

● 経済学史

- 経済理論・経済思想の歴史的発展の研究

● 根岸隆 2011.7.8(私信)

- 我国では国際経済学者は経済学説史に関心がうすく、経済学説史家は国際経済学にうといという傾向がありました...

経済理論についての貿易論

● 経済学説史の盲点？

- 経済学の独立 ← 貿易政策を巡る論議
- 政策による時代区分 → 重商主義、自由主義
- これは経済学成立までのことか

● 経済学に及ぼした決定的効果

- リカード/マルクスが残した問題
 - ◆ 国際貿易状況では根本的修正を要する。
- J.S. ミルによる「解決」
 - ◆ ミルの「解決」は、なにをもたらしたか。

『リカード貿易理論の最終解決』

●リカード貿易問題

- Ricardo: 1国におけると同じ法則が2国以上の間の商品の交換価値を規定するわけではない。
- Marx: 国際的適用においては、価値法則は根本的に修背される。

●リカード貿易問題(リカード・マルクス問題)

- 問題> (古典派価値論と調和するように)国際価値論を構成する。
- 『最終解決』は、この問題への解答。

解決から見えてくる風景

●現在のパラダイム状況

- 古典派価値論の「弱い輪」が補完された。
- 二大価値論の拮抗
 - ◆ 古典派と新古典派とが理論的に競合できるようになった。

●学説史の再解釈

- J.S.Mill (1844/1848)の「解決」の学説史への意義
 - ◆ Millの「解決」が古典派から新古典派への転換点になった。
 - ◆ これは必然的ではなかった。二大価値論の分岐点だった。
- 1870年代以降の学説史: 二大パラダイムの競合
 - ◆ 松嶋敦茂(1996)『現代経済学史:1870-1970』(後出)

教科書の通常解説

● 国際貿易論の特殊性

- いまでもリカード理論が標準的に教えられる。

● 2国2財1要素

- 1要素 → 要素は労働のみ

- “リカード理論は労働のみを投入する経済” → 嘘

● 交易条件不確定問題(第1図参照)

- 2国2財で双方に貿易の利益があるためには

- 交易条件が不確定になる。なにが決定するか。

双方に貿易の利益が存在する条件

●伝統的リカードモデル

- 2国2財が最小モデルと考えられてきた。
- 2国2財で双方に貿易の利益が存在
→第1図のK点(完全特化点、端点)に限定される。

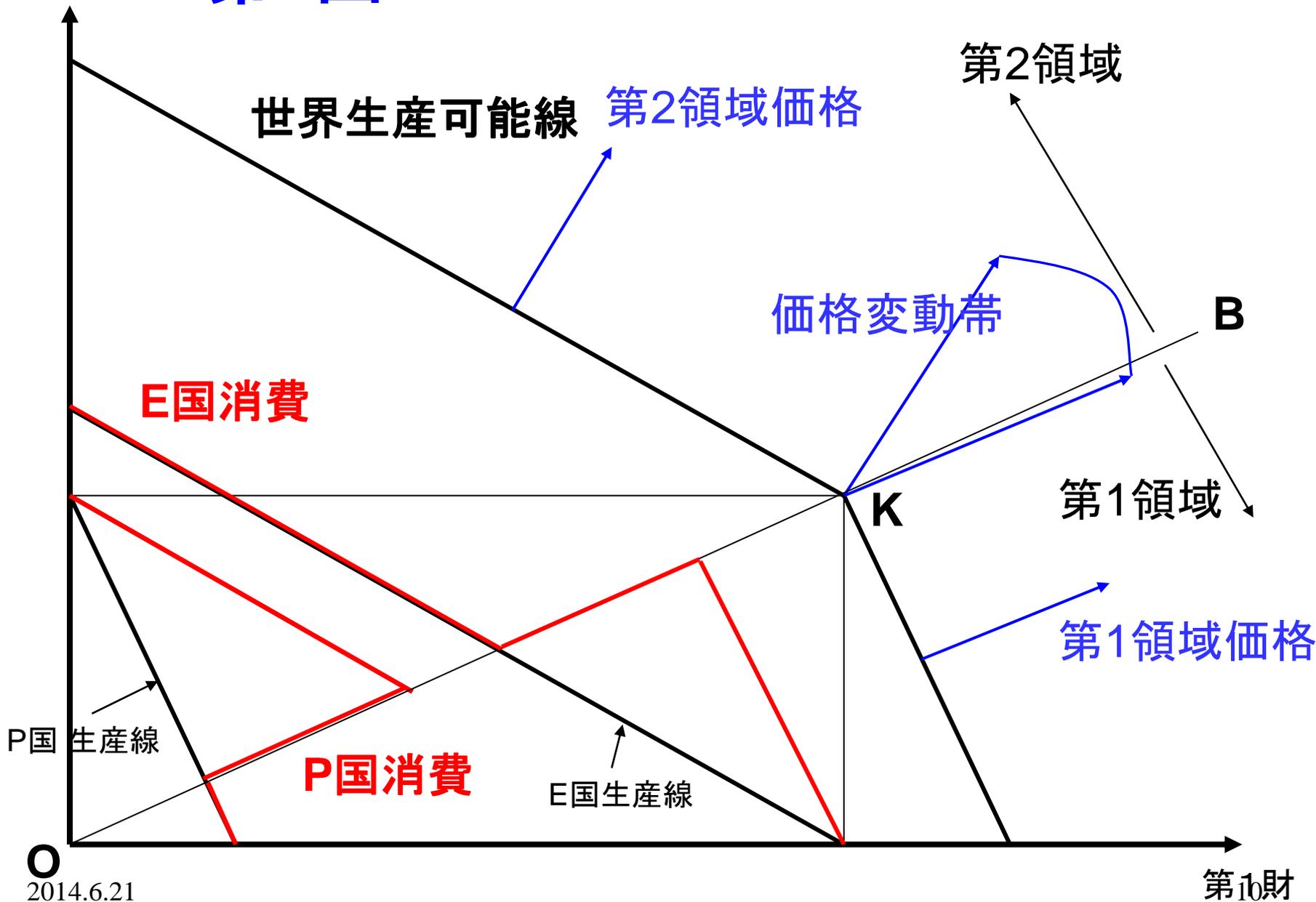
●「大国の場合」という解釈

●端点を考える問題点

- 両国の労働力量が与えられれば生産量確定
- 生産は入っていても、**純粹交換経済**

第1図

第2財



2014.6.21

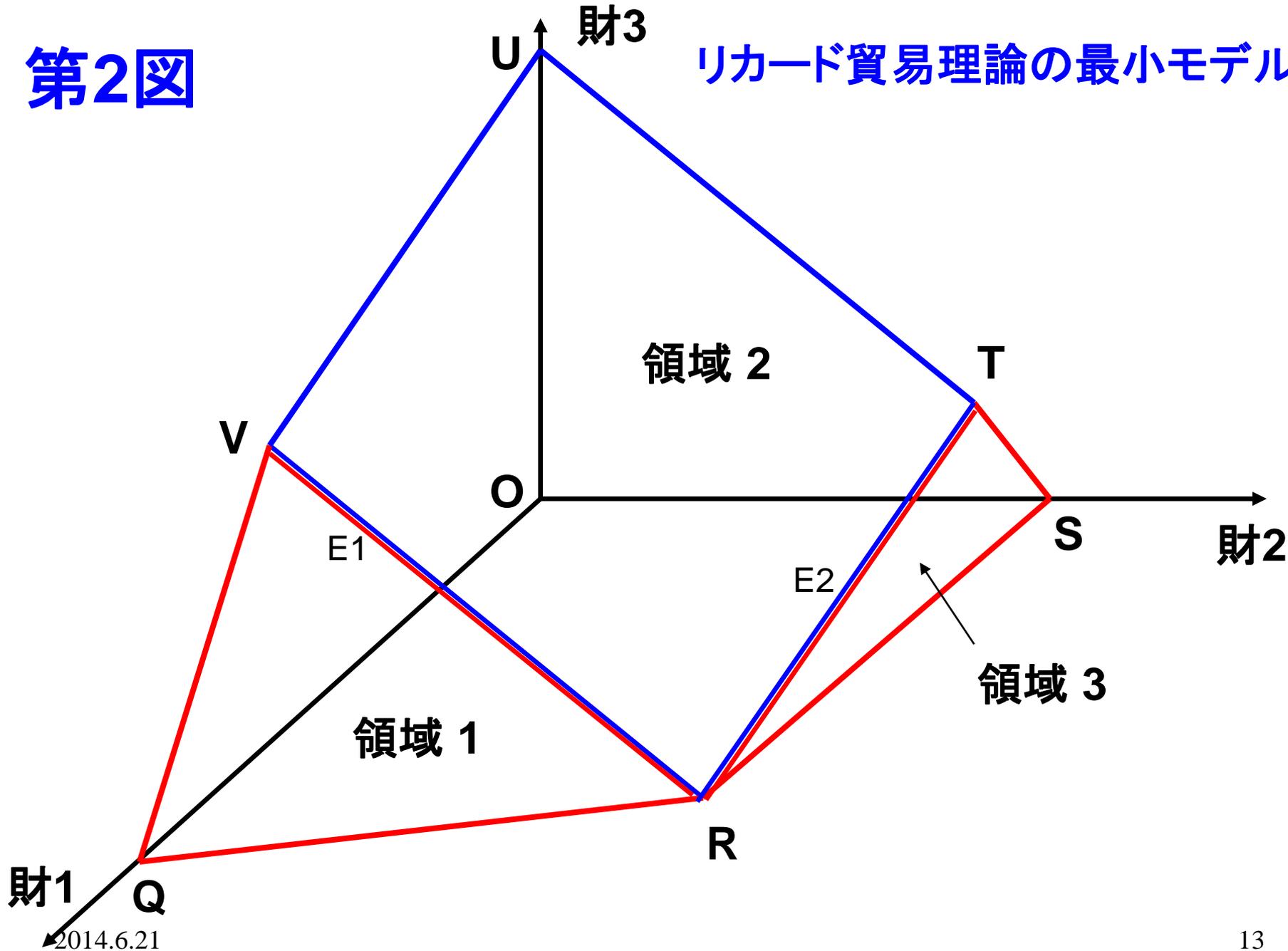
2. リカード問題の「最終解決」

リカード貿易理論の最小モデル

- 2国2財では現れない状況
- 2国3財の場合(最小モデル→第2図)
 - 完全特化点(MJ点)は存在しない。
 - 一般にM国N財($M < N$)ではMJ点は存在しない。
- 正則領域(ファセット)では
 - 平行四辺形RTUVでは、A国・B国ともに貿易の利益があり、かつその範囲で価格と賃金率が確定し、かつ一定の値をとる。

第2図

リカード貿易理論の最小モデル



リカード貿易問題の最終解決

●塩沢(2007), Shiozawa(2007)

- M国N財、技術選択が明示的に考慮されている。

- 投入財が貿易される。

 - ◆McKenzie, Jonesが試みてできなかったこと

 - ◆イギリスで綿花を栽培しなければならないとしたら、ランカシャーに綿工業は成立しなかった。

●塩沢(2014)

- 理論の再構成、学説史上の意義

新しい国際価値論の概略(1)

● 正則な国際価値

- ↑ 正則領域において確定する国際価値
- 国際価値(各国の賃金率+財価格)

$$\mathbf{v} = (w_1, w_2, \dots, w_M; p_1, p_2, \dots, p_N)$$

● 前提:

- 価格理論 各国各産業に一定の上乗せ率を仮定
- 各国各財ごとに(複数の)線形の技術がある。
- 各国の労働力量が所与

新しい国際価値論の概略(2)

●モデル特性:

- 多数国
- 多数財
- 中間財貿易
- 技術選択

●含意:

- 資本財の自由な貿易(要素貿易理論は不必要)
- 貿易はなぜ起こるか(技術の国ごとの違い)
- 気候・地下資源等は、**地代論**の問題。

●拡張:

- 輸送費
- 純粋な中間財
- 特化パターン
- 連結財

おもな帰結

- **基本定理(略式)** 世界需要が正則領域にあるならば、正則価値は定数倍を除いて一義的に定まる。(第3章定理17、第5章定理44)
 - 正則領域では需要が変化しても国際価値は一定
 - 正則な(極大)需要は競争的な技術以外の技術を用いる生産では実現できない。(第3章系20)
 - 世界需要が正則錐の**内部**にあるとき、競争的な生産では完全雇用は実現できない。(第3章系21)

国内価値論との関係

● 価値論

- 生産費説ではあるが、労働価値説ではない。
- 「各国の賃金率がどう決まるか」が要訣
- フルコスト原理の採用が国際価値論成立の要件
- Oxford経済調査、P.Sraffa 1960(後出)

● 古典派価値論の現代的展開

- 藤本隆宏 現場派経営学、全部直接原価計算
- 『経済学を再建する』提案編第3章・第4章

3. ミル「解決」の絶大な影響

経済学の流れ(学説史の基本問題)

- 古典派経済学 → 新古典派経済学(連続説)
- 競合的パラダイムが並存(不連続説)
 - スミス → リカード → Oxford調査/スラッフア → 現在
→ 反リカード → ジェボンス, ワルラス → 現在
- 本当の対立はなにか
 - 経済像・政策の対立ではなく、価値論(価格理論)
- わたしの仮説(私だけではないが)
 - J.S.ミル: 新古典派価値論への転換点

経済学における二大価値論(参考)

●古典派価値論の歴史

- Ricardoが典型(利潤を含む)、Marx, Sraffa, ...
- A. Smithには混在、リカード反動(M. Dobb)
- Ricardoは「需要供給の理論」を俗説として否定
- 生産費(リカード>スラッファ>藤本隆宏/塩沢)

●新古典派価値論

- リカード反動、J.S.ミル、限界革命(1870年代)
- 概念: 需要側の発見、方法: 限界分析
- J.R.ヒックス 新古典派の特徴はcatallactics

なぜ新古典派革命がおこったか

●古典派から新古典派へ

- 「生産の学」Plutologyから「交換の学」Catallacticsへ

- 経済史の流れからいえば逆?(商人資本→産業資本)

●需要の役割に目覚めた?

- リカード反動?

- 需要供給を対称的に扱うのではなく、**価格設定と数量調節という方向への発展**もありえた。

J.S. ミルの経済学

- そこ(転換点・分岐点)にJ.S.ミルがいた。
- 学説史上のJ.S.ミル
 - 思想史・方法論に比べ経済学の分析が少ない?
 - 例外: Appleyard and Ingram vs. Chipman、Mill's recantation (Negishiも)
- J.S. Mill体系
 - 通説的解説
 - ◆人口法則 ■ 農業の収穫逓減 ■ 賃金基金
 - これが古典派体系か? (古典派価値論の再定義)

リカード貿易問題: J.S. ミルの「解決」

● J.S. ミルはどう取り組んだか

- 2国2財、端点を考えた。(第1図 K点)
- → 交易条件が**未確定**
- **解決** → 需要条件が交易条件(交換価格)を決める。

● ミルが追い込まれた立場

- 国際価値: 生産費で説明できない重要状況
- 交換経済 → 交換の経済学

● 現在の貿易理論家たちも気づいていない。

- 端点を求めて価格を決定しようとしている。(バラダイム)

「解決」の論理的帰結(J.S.ミルの価値論)

●生産費説か需要供給説か

●ミルの立場(自己了解)

- リカードに忠実であろうとした。
- 基本は生産費説、しかし生産費で説明できないことがある。例:作者の死んだ芸術作品
 - ◆ここまではリカードと同じ。
- しかし、ひじょうに重要なところで生産費説を貫けなかった。←国際価値論

●より一般的な需要供給説へ

なぜ新古典派革命がおこったか(再説)

●古典派価値論の「欠けた環」

- 国際価値論

- リカード、マルクス→問題の所在を確認

●若きJ.S.ミルの奮闘

- 気づくことなく、「交換の経済学」に追い込まれた。

- 重要領域で、生産費説を引き下げざるを得なかった。

●Jevonsらの限界革命へ

新しい目で見直すと

● Marshall、Edgeworth

- 貿易理論のために分析用具を開発

● Jevons

- *Theory of PE.* 第4章交換の理論 “trading body”
- 同 第5章 労働の理論=「生産の理論」?
- 第2版(1879)序文

that **able but wrong-headed** man, David Ricardo, shunted the car of Economic science on to a wrong line, a line, however, on which it was further urged towards confusion by his equally **able and wrong-headed** admirer, John Stuart Mill.

- Coal Problem (1865; 66)

To the writings of Ricardo, and especially of John Stuart Mill, we are indebted for the discovery and distinct explanation of these principles.

- MarshallのJevons解釈 (Appendix I. Ricaro's Theory of Value)、半分以上がJevonsのRicardo批判への注解

新古典派革命を用意したものの？

● Jevons *Theory* 第2版序文(1879)

- 数理経済学の文献リスト作成、分類

- Gossen発見、Cournotの再評価

- 第2群 数学を使った無意味Nonsense

Canard(18018503), Whewell (1829, 1831, 1850)

- 第4群 数学を使って本質を解明した

Condillac, Dupuit, Cournot, Gossen, Walras, ...

● 第4群も「学者の自然発生哲学」？

アマチュア経済学者の哲学？ (L. Althusser)

4. 21世紀経済学への示唆

古典派価値論のRedomaining

- 古典派経済学と古典派価値論
 - 経済像と経済理論と経済政策を区別
- 古典経済学の経済像
 - 生存賃金(賃金基金)説、耐忍説、セイ法則
 - 労働価値説、人口法則
- 古典派価値論(ここから組みなおす)
 - 正常価格(価値論)、生産費説
 - 原価(生産費)とは何か[管理会計学の重要問題]

わたしの考える古典派価値論

- 現代理論(異論がありうる、以下は塩沢説)
- 価格理論
 - Sraffa(1960) + オクスフォード経済調査(1952)
 - 市場の競争状態 → 上乗せ率 → 価格と実質賃金
 - 国際価値(賃金率+財・サービスの価格)
- 価格と数量の二重調節過程
 - Sraffaの原理(1926)、企業レベルの**有効需要**
 - 価格変動のメカニズム(数量調節と需要変動)

ケインズの構想と古典派価値論

●『一般理論』

- 新古典派と古典派とを区別しなかった。
- マーシャル体系の上に理論構築を試みた。
- 反ケインズ革命(1970年代以降)を招いた。

●有効需要政策

- 総需要(Keynes)だけでなく需要構成(Ricardo)も
- リカードとケインズが手を結ぶ。

●課題 金融経済と実体経済の総合理論

ありがとうございました。

- どんどん意見・質問をお出してください。